

林地と成りたる頃より六勳林と呼びたるべし。按ずるに、六勳てふ地名は、如何なる由縁にて起りたるか。源平盛衰記に六勳寺國府と見え、義經記に六勳寺波とある。六勳寺は、越中國射水郡の地名にて、今は六波寺と書けり。此の泉野なる六勳林も、寛文の頃は六道林と書きたりけん。寛文十二年に筆記せし箕浦氏自記に、六道林の堤など見え、三壺記には、寛文十一年に犀川の内川、われ岩と云ふ所より用水を取り、泉野・長坂の下六道林悉く田地に開發す。とあり。國事昌披問答に、寛文十一年に在々所々の倒れ百姓共を新百姓に被取立、泉野長坂の下、六道林を悉く在所に立て、新田を開かせらる。と載せられたれば、是は三壺記等に據つて記載せしにや。六斗林と書けるは、元祿頃よりの事なりけん。改作所舊記に載せたる里長の言上書に、

御尋に付申上候。

一、泉野と申は、何方より何方之間を申候哉と御尋被遊候。野田道より十町許南伏見新村を限、西は泉村を限、東は野田山麓迄、北は才川を限、此間を泉野と申候。泉野村・泉野出村出來不仕以前は、松原に而御座候由承及申候。

一、ろくと林は、泉野村領之内に御座候。ろくと林と申文字は如斯、六斗林と書申候。外に文字御座候哉不奉存候。右就御尋申上候。

元祿十四年三月二日

石川郡十村役連名

野村五郎兵衛殿

不破平左衛門殿

小塚善左衛門殿

按ずるに、今ロクトウと呼ばれど、盛衰記には六勳と書き、三壺記等に六道と書けるに據れば、越中の六勳寺と同じく、此なるもロクトウと濁りて呼びたるを、後にはロクトウと清音に呼び誤りたるゆゑ、六斗林とは書きたる歟。又は六斗の文字を當てけるより、ロクトウと清音に呼びたるならん。

○六勳太郎光景傳

源平盛衰記卷廿八、壽永二年四月廿七日越前國三條野合戰の段に云ふ。加賀國の住人林六郎光明が嫡子に、今城寺太郎光平と云ふ者あり。褐の直垂に袖をば耕地の錦を付けたりけり。紫糸威の鎧に、大中黒の矢頭高に負ひ、重藤の弓の

眞中取り、八寸に餘りたる大栗毛と云ふ馬に白覆輪の鞍置いてぞ乗つたりける。此の馬きはめて口強くして、國中には乗隨へる者なし。林六郎光明が郎等に六勳太郎光景と云ふ者許ぞ乗り従へける。今度も光景をのすべかりけるを、打出でんとての時光平父に逢ひて、今度は大栗毛に乗りて軍に出でんと云ふ。父光明此の言を聞きて、弓取は口の強き馬に乗りては、必ず大死する事あり。不可有事也。光景を乗せよといひけれども、光平は弓矢取る身は軍場こそ晴にて候へ。此日頃勞り飼置きて、此大事に乘らではいつか乗るべきとて、父が諫にも隨はず。押して乗りて打出でつゝ、齋藤別當實盛と引組みけり。光平は若く、實盛は老いたり。既に別當危く見ねけるに、郎等二人落合ひて、光平頭をかゝれけり云々。とあり。按ずるに、林六郎光明は、富樫氏と同姓同祖にて、石川郡林郷を所領となし、富樫氏と共に木曾義仲に屬し、軍功を勵みけり。其の頃六勳太郎光景は、泉野六勳林の地より出でたる人なるにより、六勳太郎と呼ばれたるなるべし。

○六勳林堤古傳話

箕浦高良自記に云ふ。織田信長公の時、柴田修理へ越前國並に加賀國石川郡等二十萬石を賜はり、金澤城に甥佐久間玄蕃を置き、加州の一揆頭共を悉く打殺せり。其頃一揆蜂起し、泉野六道林の堤、櫻島の下川原にて、大勢を打殺したり。その靈魂或は高尾の坊主火と成り、或は川原にてガウ兵藏久藏と呼ぶ聲夥しと云々。此の筆記は奥書に、寛文十二年春二月吉日箕浦五郎左衛門中原高良判印とありて、參議中將綱紀卿の時藩士牧淺右衛門より差上げたるものに、實に寛文前の古傳説共を記載せり。そのかみ六勳林に堤ありしと見ゆれど、此の地邊犀川より用水を取り開墾せし頃、堤を廢したるなるべし。高尾の坊主火といふ陰火は、今も夜中高尾山邊より出るゆゑ、諸人の知る處なり。三州志體彙餘考、長享二年六月富樫政親高尾城にて滅亡の條に、高尾の坊主火は富樫政親の靈魂にて、坊主は亡主の意なるよし註解すれど、此は富田氏の附會妄誕といふべし。元文二年の加州産物志に、高尾坊主火は石川郡高尾村領の城山といふ處の谷合より出で、其の陰火元一つなれども、後に幾つにも分れ、また一つと成りて、元の所へ納ると記